
夏至と僕

旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏至と僕

【Nコード】

N9063X

【作者名】

旅人

【あらすじ】

夏至の日に現れた蔓の塔。

しばらく月日経ちその混乱が落ち着いたかと思われたが……

プロローグ（前書き）

拙い文章ですが、見てくれたらありがたいです。

ブログ

2001年6月21日 15時35分

確か、夏至の日だったと思う。

大きな揺れが来た。

最初は大きな地震が来たのだと思った。

しかし、揺れはすぐにおさまり安心して外を見てみると、

信じられないことが起こっていた。

まるで大木のような大きい蔓が何本も絡み合いながら天まで伸びて行く。

そして蔓で塔のようなものを創り上げる。

まるでその蔓で世界を侵食していくようであった。

私はこの時はまだ信じられなくて夢だと思っていた。

夢だと思ったのは私だけではないだろう。

蔓の塔が、そびえ立ってから、数時間後に蔓の塔から光が見えた。

そして蔓の塔から星のようなものが、彗星のように世界中にたく

さん流れていく。

それはとても美しいもので思わず、私はみとれてしまった。

夏至前（１）

俺は苦手な数学の授業でちっともおもしろく無いので俺は窓の向こうに見えている、

空高くそびえ立つ蔓の塔を見る。

昔はあの蔓の塔のが存在することが非日常的な風景に思えたけれど、蔓の塔も数年もたつと日常の風景にほとんど染まってしまっている。

でも蔓の塔の風景が日常になりつつあるが、そこにはなにが存在するのか分からない俺はあの場所には何があるのかを知りたいなあ。なんてことを思っていると、チョークがもの凄い勢いで俺の耳を掠めていく。

「ほら、村上ぼーつと外を見ていないで、この問題を解いてみる！」

数学担当で俺のクラスの担任である島田がもの凄い剣幕で言う。

「ヤバイと思いつつ、焦るが今どこの問題をやってるのか分からないので答えられるわけないだろ」と思っていると、

「もう答えなくていい、特別に宿題を倍にしてやるから後で職員室に來い」

少し呆れながら口を開く。「ちょっと待ってくださいよ先生」

俺は抗議しようとしたが、ちょうどチャイムが鳴って、

俺の声が掻き消されたために島田に抗議することが出来なかった。

「よりによつてめんどくさい島田に目をつけられるとは恭介も今日はついてないわねえ」

後ろの席に座っている春が唇を歪ませながら、にやにやと笑う。

「どうでもいいだろ。つーかなんでお前は笑ってるんだよ」

「だって人の小さな不幸を見ると、なんだか面白いんだもの」
にやにやしながら春は答える。

小島春は小学校からの幼なじみなのだが、昔から気がとても強く人

とズレていているというか、

電波をいつも送受信しているような奴なのだ。

学校の時なんか「夢の中で私は飛べると言われた」と春は言って、実際に屋上から飛ぼうとして、怪我をした事があるくらいだ。

そんなこともあるせいかな、こいつに近づくような奴は、そんなに多くない。

「相変わらずお前は性格が悪いというかなんて言ってるな」

「あたしのどこが歪んでるっていうのよ？」

春はにやにやした顔から唇を尖らせてムツとした顔した。

「……」

俺は何か言い返そうと思ったが、ここで言い返すと、多分口喧嘩になるだろうしそれはめんどくさくなるので、何も言わなかった。

「まあ、いいわ。あんたはあたしの手の掌の上で踊ってるだけだから」

さっきのにやにやした顔をしながら言う。

「なんでお前の掌の上で踊らされてるんだよ」

「その時が来たら分かるわよ」

春の言うことは相変わらず意味の分からないことを言うなあ、なんて思いながら次の授業の準備をする。

「ああ疲れた」

こつてり島田に嫌味を言われながら居残りしていたのがやっと終わったので俺は腕を上には伸ばしながら呟く。

家に帰ろうとして校門を出たところで誰かに見られてるような気がする。

やっぱり俺が家に帰る途中もずっと誰かの視線を感じる。誰かが後ろをついて来てるのか？

そう思った俺は後ろを向くがそこには誰もいない。

気のせいだろうか、春だったら絶対幽霊だって言うだろうなと思った時、後ろの草むらからガサツという音を聞いて、驚いて思わず後ろを見ると野良猫だった。このさっきから視線のようなものを感じ

てたが、この猫だったのか。

「なんだよ、驚かすなよお前」

「にゃあ」

もちろん猫なんかには俺の言葉が分かるはずがなく、懐きやすい猫なのか俺のほうに飛びついてくる。

「残念だけどさ、俺の家は団地だから猫は飼えないんだ。ごめんな」

俺は猫に話しかけるように一人で呟く。

今度なんかエサでも持って来てやろうかなと思いつながら家に帰る。

「校長、島田ですが、入ってもよろしいでしょうか」

島田は校長室をノックする。

「ああ、島田君が入ってきてくれ」

校長は椅子に座りながら、書類に目を通していた。

「失礼します。あの用事というのは？」

「君もあの塔のことぐらいは知ってるだろう？」

校長は窓の向こうを見て、蔓の塔がある方向を指差した。

「もちろんあの塔があるの知らない人なんていませんよ。」

島田は何故校長がいきなりこんなこと言うのか分からないのか、首を傾げながら答える。

「では、あそこに人が行ったことがあるのは聞いたことは？」

「いや聞いたことなんて無いですし、だいたい政府はあんなところに近づけやしないと行ってたじゃないですか。僕も暇じゃないんでこれ以上関係無い話をするなら帰りますよ。」

島田は少し呆れながら校長室を出て行くとした瞬間

「では今までの話がこの学校と関係あると言ったらどうする？」
今まで窓の向こうを見ていた校長は厳しい表情で島田に再び目をやる。

夏至前（２）

深夜にお笑い芸人達が出ているテレビ番組を見ていると携帯電話が鳴っている。

俺は買ってから一回も着信音を変えたことがないので、相変わらず面白みの無い音である。

かけてきた相手を見ると春だった。

「こんな時間になんだろ。」

まあ春の事だからろくでも無いことは確かだろうな。

そんなことを思っ、少し憂鬱になりながら携帯の通話ボタンを押す。

「もしもし」

「出るのが、遅い！」

「こんな時間に電話をかけてくるお前に言われたくない」

「こんなこと話してる場合じゃないわよ、UFOを見たのよ。あんたも早く来なさい。」

春は興奮しながら一方的に話してくる。

ああ、やつぱりろくでも無いことだったか。

「いやなんで俺も行かないといけないの？今から外出るのめんどくさいんだけど」

こんな意味不明なこと言うのはせめて学校で会う時ぐらいにしてくれよと

俺は思いながら否定の返事を返す。

しかし電波を受信中の春がもちろんわかったなどと言うわけがなく。

「なんで来ないの？UFOよ、UFO！気になるでしょ。だから早く来てよ。高崎公園にいるからね」

一方的に切られてしまった。

これで行かなかつたら、学校で春に会った時につるさく言われる

だろうな、とすぐに想像が出来たので、高崎公園に向かうことにした。俺は自転車で高崎公園に向かう。

高崎公園はこの町では一番大きな公園で俺もたまに散歩でこの公園に行くこともあるのだが、高崎公園に着くと少し驚いた。

『敷地内立入禁止』

公園の前の大きな看板に書かれている。

「あれ、なんでだ？」

看板をよく見ると、三日位前から工事で公園内には入れないらしい。

公園に着いた方がいいが、春がないので、とりあえず春に電話をかけることにした。

「公園に着いたけど、今どこに居るの？」

「ちよつと待つて、今行くから」

呼び出したのはあいつなので俺があいつを待たなきゃいけないんだろうかと思いながら電話が切れた瞬間、俺の上から春が現れた。

正確には春はフェンスをよじ登って、フェンスの上から降りてきたのだ。

「待たせたわね、UFOが見えた場所に行くわよ」

春は公園を指差す

「お前、今までどこにいたんだ？」

「公園の中だけどそれがどうしたの？」

「工事中で敷地内に入るのは禁止なはずだけど」

呆れながら春に聞く。

「そんなの知ったこっちゃないわ、行くわよ」

何を言っても今の春は聞かないだろうし、それに正直、俺も春が言うUFOらしきものの、の正体が知りたいという好奇心も少しはあったので春に付き合ってやることにした。

俺達はフェンスをよじ登って、公園の敷地内に入って公園内を少し進むが、特に変わったところもない。

「あのさ……お前は本当にUFOを見たのか？」

「見たわよ、UFOの光がこっちから見えただんだもの」

暗くてあまり春の顔は見えないが、春の強い口調でいらいらしているのが分かる。

しかし、この広い公園を全て歩き回るのは半日以上かかる。

「もう今日は暗いし、明日にしないか？」

今までUFOを見たとき興奮していた春だったが。

「そうね、もう眠いし帰ろうかな」

少し残念そうに言う。

俺は帰ろうとするが、春は諦められないのか、立ち止まっている。

「春……」

後ろに立ち止まっている春の方を向いた瞬間、一瞬だが向こうから眩しいほどの光が見えた。

その眩しさに少しの間、瞼を閉じてしまい、再び瞼を開けると、春が光が見えた方向に走っていた。

「おい、春！」

春に向かって叫ぶが、春には俺の声は届いていない。春を追いかけて走ることにした。

しかし、さっきの眩しいほどの光はなんだったろうか？まさか本当にUFなんてことはないよな……

春が急に立ち止まった。

「春、急に走るなよ」

俺は息を切らしながら言う。

すると春は近くにある草むらに隠れて、口の前に人差し指をたてる。

「早く隠れて」

小声で春が言うので俺はよく分からないまま草むらに隠れた。人の足音が聞こえてくる。こんな夜中に誰が？

工事をしている人達も、もうこの時間じゃ誰もいないはずなのに。

「見てよ、あれ」

春の言う通りに春が指差す方向を見ようとするが、暗くてよく見えない。

しかし、この公園には不自然な大きな建物が建てられている。

ここからでは少し距離もあるので大まかにしか分からないが。

「なんでこんなもん造ってんだ？」

俺はぼつりと呟く。

「分からないけど、なんだか面白そうじゃない。」

春は暗視ゴーグルを覗きながら言う。

「つーか、お前なんで暗視ゴーグルなんか持つてるんだよ」

「いつ面白いものが見れるか分からないでしょ。だからよ」

春は何故か少し得意げに答える。

答えになってないだろ、と胸の中でツツコむ。

「ちよつと、俺にも見せてくれよ」

春から暗視ゴーグルを借りて建物の近くの様子を見ると、銃を持った一人の大男が立っていた。

ばれても説教くらいで済むだろうとおもっていた。

だけど日本で銃を持っている。

この事実が想像以上にヤバイものだったことが分かる。

とりあえず、今分かるのはあの建物に人が居るということだけだ。

「あ、携帯みたいなもの取り出した。」

春が呟く。

「全く、疲れるよな。ああそうだ、今のところ問題はない」

どうやら建物から出て来た奴は誰かと会話をしてるみたいだ。

出て来た奴と俺達の距離はけっこう離れているのだが、大きな声で話しているので、俺達の場所まで聞こえてくる。

「しかし工事とは笑わせるよな、まあ、確かに工事には違いないが。終わったあとは公園じゃないからな。ああそれに関しては今さっきに送られてきた。」

公園じゃなくなるってどういうことだ？

何か他の建物が造られるのか？

いや、もしそうだったら町中の噂になってるはずだし……
いろいろと考えていると

大音量で流行りの曲が流れる。

「あ、メールだ」

春は携帯を取り出してメールを確認している。

「話しの途中だが電話を切らせてもらう。いや音が聞こえたから少し見に行くだけだ。」

こっちに来るかもしれない。

「お父さんが早く帰って来いってさ」

春は呑気に言う。

「いいから逃げるぞ」

俺はそう言つて春の腕を掴んで走る。

ここまで来れば大丈夫だろう。

「これなんだろうね？」

「そうだな」

目の前にあるこれは何だろうか？

大きな乗り物みたいだな……そう、まるで……。

「いや見てませんが見つけ次第報告します」

ここにも人がいるのかよ……くそつ。

「走るぞ、春」

何とか見つからないで俺達は公園を出ることができた。

俺たちは周りを見渡す。

「もういないね。大丈夫みたい。それにしてもさっきのはなんだっ
んだろうね」

「さあ……」

それは俺が知りたいくらいだ。

さっきのこともあるし、春を家に送り届けてから家に帰った。

俺の頭の中にたくさんの疑問があつたが、それをいくら考えても結局は分からないので寝ることにした。

夏至前(3)

「……以上だ。」

校長が話し終える。

「しかし、生徒はまだ子供ですし、そんな危険なことはさせられない。どうにかならないんですか？」

島田は語気を荒げる。

「言い訳になるが……私だって何もしなかったわけじゃないんだ。根回しやいろいろなしつたさ。しかし駄目だった。」

校長は目を落とす。

「しかし、なんで『あいつ』何ですか？特に変わったところもない平凡な生徒ですよ？」

「残念だが、私にも分からないんだ。何も聞かされてないからね」

校長は島田の質問に答える。

「失礼しました」

島田は苦虫を噛むような顔して校長室を出る。

「あれが無ければ、もっと平和だったろうに」

校長は蔓の塔を見ながら少し哀しそうに呟く。

昨日のあれはなんだったんだろうか

まさか本当にUFOなのか……

いや、そんなはずはない。

俺は思わず頭を振る。

「おーい村上、何難しい顔して考え事してんだ？」

森脇が不思議そうに俺を見る。

「まあ、色々あったんだよ」「色々ってなんだよ」

「まあ、何でもいいじゃないか」

正直に昨日の話しをしても馬鹿にされるだけなので、昨日のことは話さないことにした。

「まさかお前誰かに告白して振られたとか？」

その時、春と噂好きの片瀬が来て

『誰に告白したの？』

二人とも同時に俺の机を叩きながら言う。

森脇は俺をにやにや笑いながら見ている。

それを見た俺は森脇に後で絶対仕返ししようとか心中で誓う。

「そんな訳ないだろ。だいたい気になる相手がいたとしても、チキンの俺に告白できる訳ないだろ。」

とりあえず誤解を解こうとする。

「まあ、確かに村上くんはそういうタイプじゃないよね」

片瀬はつまらなさそうに言う。

「だいたいあんたなんか好きになる人はいないわよ」

春は深呼吸してから口に出す。

しかし二人の言葉はその通りなんだが、なにもそこまで言わなくてもいいじゃないか。

まあ、その通りだから言い返すことが出来ないけれど……

「あのさ、話は変わるけど、今度才力研に来てよ」

片瀬が口を開く。

すると森脇もそれに続いて「才力研に来るならいつでも来てくれよ。今度なんかやろうかなと思ってるからさ。後、小島も来てくれよ」

春はこくりと頷く。

「分かった。今日の放課後にでも行くよ」

才力研というのはオカルト研究会のことで、片瀬が副部長で、森脇が部長である。

春も入部しているが、確か才力研は最近ほとんど活動休止していたような……

どっかのバンドじゃないが活動再開でもするんだろうか。

夏至前（４）

放課後、俺と春はオカ研の部室に入る。

まだ俺達以外にはまだ人がいないみたいだ。

「昨日のこと調べない？」

俺も同じことを思っていたので首を縦に振った。

春は部室にあるデスク型パソコンを使って調べている。

オカ研の部室には、オカルト関係の記事が大量にファイルに纏められているので、

棚にたくさんあるファイルの中から、ＵＦＯ関連の記事を調べてみることにした。

「えーとＵＦＯの記事は、えーとこれか。」

ＵＦＯ

未確認飛行物体。

代表的な事件はフ・ファイタ・事件、ケネスアーノルド事件、ロズウェル事件等日本でも目撃例がある。

しかし、どれもが信憑性に欠けていた。

だが蔓の塔事件の後、ＵＦＯが存在するのではと思われる事件が多発した。

日本で代表的なのは神奈川フ・ファイタ・事件である。

蔓の塔に向かったはずの自衛隊の戦闘機が行方不明になってしまった。

その後、消えたはずの戦闘機と同じものと思われる機体が神奈川で何回も目撃されている。

ここまでなら都市伝説と同じなのだが、その戦闘機によって一部の地域が被害にあった。

しかし、その戦闘機は政府によるとまだ行方不明になっている。

一部ではアメリカやロシアの仕業ではないかとの見方もある。

ああ、これテレビとかでも報道されたなあ。

昨日の乗り物がその戦闘機ってことは……

いや、さすがにそれはないか。

あんな公園に戦闘機なんて置くはずもない。

もし、戦闘機なら基地内に隠しておくだろう。

だいたい、そんなに都合よく分かる訳無いだろうし。

「春、なんか見つかった？」

春の方に目をやると春はパソコンでゲームをしていた。

「なんでゲームしてんだよ」

「だって、調べても見つからなかったし、それにもうUFO調べるのは飽きたから。」

「いや、飽きたって昨日の事はどうでもいいのか？」

「んーどうでもいいなんて思っではないんだけどさ……」

「じゃあ、なんだよ」

「よく考えてみなさいよ、」

「はあ？」

「今の返事であんたがバカって事を思いだしたわ」

常に電波を垂れ流しているお前に、バカと言われたくはないと、俺は心の中で強く思う。

「だってこれ以上調べても分からないじゃない。 近くの川で大昔の恐竜の化石を見つけるくらい難しいわよ」

相変わらず変な例えだけど言いたいことは分かる。

今の俺達はほとんどあの事については分からない。

調べてもどこにも書かれてはいない。

要するに今の俺達に知らないし、知ることも出来ないということか……

「はあ……」

ため息をつき机にうなだれる。

その時、部室の扉が開いた。

「二人とも先に来てたのか」

「ああ」

「教室で二人きりか……怪しいな。」

森脇はにやにやと笑う。

「いや、そんなんじゃないから」

春はゲームに集中していて、こちらを見ようもしない。

多分森脇が来たことも気づいていないんだろな。

「で、何かやるって言ってたけど何をやる気なんだ？」

「正直、俺も詳しいことは分からないんだよね。片瀬が何かやるって聞いてただけでさ」

「じゃあ片瀬しか何やるか知らないのか」

少し呆れながら言う。

「片瀬は新聞部で忙しいだろうし、遅くなると思うわ」

森脇は頭をかきながら言った。

元々、片瀬は、オカルト研究会の副部長である前に、新聞部の部長なのだ。

この部、オカルト研究会は、かなり昔からある部だったのだが、だんだんと人が少なくなつて、

俺たちの代で廃部寸前までになっていた。

その時、片瀬が俺たちを集めて、廃部の危機は去つたのだが、片瀬の狙いは別にあつた。

片瀬が言うには。

「こんなにたくさんさんの資料、機材などがそろっているのに、もったいないじゃない」

片瀬がオカルト関係のことを記事にしたいがために俺たちを集め、存続させたのだ。

会社の関係で言うと、新聞部が親会社で、オカルト研究会は子会社である。

要するに新聞部の延長みたいなものである。

しかも、春除いては無理矢理入らされたからな。

「とりあえず片瀬が来るまで何しようか」

「何って言ってもなあ」

俺に何って言われてもな特にないし。

「ん？お前UFOなんか調べてたのか。」

森脇がさっきまで俺が読んでいたファイルを見つける。

「何、お前UFOなんかに興味があるの？　つか、最近みんなオカルト系の話してるよな」

最初は春以外はオカルトに興味なんて無かった。

この部を作るきっかけになった片瀬すらも記事でオカルトを扱うから作っただけで、

そこまでオカルト自体には興味は無かったらしい。

もちろん無理矢理入らされた俺なんか興味があるわけがなかったのだが、

蔓の塔の後になると、皆がもしかしたら本当にあるのではと思っているのか、オカルトブームになっている。

「まあ、ちよつとね」

昨日のことを言おうかと思ったが、信じてもらえないどころか、こいつにからかわれるだけなので、言うのは止めておいた。

「遅れて、ごめんね」

片瀬の元気な声が教室に響く。

「遅くなるなら、連絡くらいしろよ」

「ごめん、いろいろあつて、連絡するの忘れちゃったよ」

片瀬は笑いながら、軽く頭を下げる。

こいつ、絶対悪いと思ってないな。

「で、何やるつもりなの？　出来る範囲の事にしてくれよ。」

森脇は昔、雪山には雪男がいるからということ、無理矢理、取材の手伝いで雪山に連れて行かれて雪山で凍え死にそうになったとおおげさに話してたのを思い出した。

ちなみに、もちろん異性人なんかはいなかったらしい。

そのせいか森脇は少し心配な顔をしながら聞く。

「今回は、高雄山に行くから。」

「なんで高雄山なんだ？あんな所何回も行った事があるけど、何も無いだろ。」

「蔓の塔の後、夜の一時から二時までの一時間だけ、ある場所に異世界につながるトンネルがあるらしいのよ。」

チョークで黒板に書きながら話す。

「だから、取材に手伝えだろ？」

森脇が少し呆れつつ言う。

「話が早いわね、じゃあ明後日の夜十時に学校の校門前ね」

「分かったよ」

気のない返事をする。

めんどくさいが断ったら、新聞部の記事にあることないことを書かれてしまうので行くことにした。

蔓の塔の後といっても、いわゆるオカルト的現象が続出した訳でもないし、噂も前と同じで信憑性がない。

例外なのはUFO事件と蔓の塔くらいである。

しかし、めんどくさいが断ったら、新聞部の記事にあることないことを片瀬に書かれてしまう恐れがあるので行くことにした。

夏至前（5）

「次はこれお願い」

メニューを指差しながら、店員に頼む。

「おい、春そろそろ止めてくれよ」

懇願するように言う。

ああ、簡単にあんな約束なんかしなければよかった。

――昨日――

テレビでサッカーの試合を見ていた時だった。

「ピンポン」

家のチャイムが、人を訪ねてきたことを知らせる。

「はい、今行きまーす」

家の扉を開ける。

「やつほー、村上君」

「夏樹さん久しぶりじゃないですか。今日は、おばさんじゃないんですか？」

俺の父親は、出張で長年海外に単身赴任。

母親は、俺が物心つくかつかないか位の時に蔓の塔事件の混乱に巻き込まれて、

亡くなってしまっていて、父の古い友人でもある小島家には、

昔からお世話になっていて、今でも月に一回程度、こうして家に来るのだ。

夏樹さんは、春の一回り年が離れた姉である。

「うん、風邪引いちゃってさ、それで今日は、私と春とできたんだけど」

春と？アイツはどこにもいないけれど……

嫌な予感が頭の中に走る。

「えーと、春はどこですか？」

「あれっ、さっきまで一緒にいたんだけど」

夏樹さんはキョロキョロと周りを見渡しながら言う。

まさか、勝手に家に入ったのか？

そう思い、すぐに自分の部屋に戻る。

嫌な予感ほみごとに的中してしまった。

「へえ、こんなんでも興奮しちゃうんだ」

俺の部屋に隠しておいたはずの工口本を見ながら、呟く。

「なんで工口……じゃなくて、なんで俺の部屋に入ってるんだよ」

強い口調で春に言う。

「別にいいじゃない、そんなこと。それより、もしかして私にもこんなこととして欲しいと思ってるの？」

工口本の表紙を指差し、上目遣いをしながら、唇を動かす。

コイツ、完全に俺のことからかって遊んでやがる。

「いいから、出て行け」

春の首根っこを掴みながら、無理矢理、春を部屋から追い出す。

リビングに戻ると、夏樹さんが料理を作ってくれている。

「冷蔵庫にあるもの使っていい？」

「全然、大丈夫ですから、勝手に使っちゃってください」

一方、春はまるで自分の家のようにテレビでサッカーを見ていた。

「お前、サッカー興味あったっけ？」

「これ、負けてるほうが勝つって、なにかテレパシーを受け取ったのよ。だから本当にそうなるか確かめたくてね」

「ない、ない。今後半30分で3対0だし。ここから逆転したら、なにしてもいいよ」

春の電波には、呆れを通り越して、笑えてくる。

『ついに、逆転、逆転です！！』

実況が興奮しながら、叫ぶように言う。

「うそだろ……」

この結果を信じられないでいると。

「約束は絶対に守ってね」

春はにっこりと笑顔を作りながら、俺に言った。

夏至前（6）

そつ、簡単にあんな約束なんかしなければよかった。

頭に手を当てながら、後悔する。

春が前から一度行ってみたかったという、学生には少し高級な喫茶店で、

次から次へと甘いものを春は頼んでいく。

「んー、これもおいしい。評判がいいだけのことはあるわ。ここ」
パフェを口に運びながら、言う。

一方の俺は、頭の中で父さんの仕送りで支払わなければいけない電気代や食費等を差し引いた分、
要するに小遣いの計算をしながら、店の中で一番安かった珈琲だけを頼む。

しかも、不幸なことに春は大食いなのだ。普段はそんなに食べないのだが、好きな物となると、

人の胃の許容量をはるかに超えているのでは、というくらい食べるのだ。

テレビの大食い選手権にも出れるのではないかと、密かに俺は思っている。

そのくせ、いくら食べても太らない体質なのである。

おそらく、世の多くの女性からは、やっかまれるタイプであるだろうな。

「お前なあ、なんでも言うこときくとは、言ったけど少しは遠慮しろよ。太るぞ」

無駄だと思いつつも、「太る」という言葉を使ってみた。

「なんで、あんななんかに遠慮しなきゃいけないのよ。別に太るとか気にしてないし」

やっぱり、無駄だったかあ。

思わず、ため息が出てしまう。

しかし、気のせいか春の食べるペースが落ちたように思える。

「そろそろ店出ようか」

「え、もういいの？」

春にしては食べる量が少ないので思わず聞き返してしまった。

「もういいわよ、ほら出るわよ」

強い口調で言い放ち、先に店を出て行ってしまった。

アイツも少しは気を使ってくれたのかなぁと思いつつレジに向かう。

レジの会計で、学生にはきつい値段に少しの間、動けなくなり、そして泣く泣く支払った。

結局、店を出る頃には、財布の中には、ATMで下ろしたはずのお金がほとんど無くなってしまい、

ほんの少しの小銭しか入っていなかった。

「次はゲーセン行くわよ」

「はぁ……」

ため息を吐きながら、追いかける。

「うーん……」

春は真剣な顔つきで、ボタンを押す。

「だめだぁ」

クレーンは人形を掴むがすぐに落ちてしまう。

春はクレーンゲームに悪戦苦闘していた。

「もうやめておけよ」

呆れながら言う。

「でも、あれほしいんだもん」

春が指差す先には、かぼちゃの形をしたゆるキャラがある。

あれがほしいという神経がよくわからない。

「じゃあ、俺がとってやるよ」

人形を一発で取ってやって、取った人形を春に渡す。

「あ、ありがと。じゃあそろそろ家に帰るから」

「あ
あ」

春はまるで、夕焼けに走っていくみたいに帰っていった。

夏至前（7）

高雄山に着く。

昼間と深夜では違う山に見えてきて何回も来ている山なのになんだか気味が悪い。

「高雄山のどこらへんにその噂のスポットとやらはあるんだ。」

片瀬に聞く。

「頂上までは登らないわ、リフトがある所と吊橋の所よ」

片瀬は答える。

「二つあるけど、どっち行くんだ？時間がないだろ」

噂の異世界に続くトンネルが開くのは一時間だけで、とてもじゃないが一時間だけでは二つも回れない。

「だからあんた達を連れてきたんじゃない。二手に分かれるのよ」

片瀬は馬鹿にしたような目でこちらを見ながら、答える。

それから、一対一じゃんけんをして勝った同士、負けた同士でペアになった。その結果、俺と片瀬、森脇と春がペアになった。

「じゃあ二手に分かれるわよ、私達は吊橋のほうに行くから、そっちはリフトに行って、着いたら時間まで待ってて、何か起こったら連絡とカメラで撮って。それと一時間たっても何も無いようなら、そのまま帰っていいわ」

片瀬は説明しながら森脇に荷物を渡す。

「わかった」

森脇はけだるそうな声で言う。

「ねえ、リフトに乗れるの？」

春はぼけっとしながら聞いてくる。

「いや、この時間にリフトが動いている訳ないだろ」俺は呆れながら答える。

「でも動いてるかもしれないじゃん」

春は強い口調で言う。

いつもながら、春は何故根拠もなしにそんな事が言えるのだろう。

「小島、そろそろ行くぞ」

「じゃあまた明日ね」

春は少しさびしそうな顔で言って、リフトに向かって行った。

「私たちもそろそろ行くわよ」

「ああ、わかった」

俺は急いで片瀬の後を追いかける。

老朽化していて、今にもロープが切れてしまいそうな吊橋を見ながら、

「これは渡らなくてもいいんじゃないか？」

びびった俺が片瀬に聞く。

しかし、片瀬の答えは、

「渡るに決まってるでしょ」

片瀬は俺の腕をぐいっと思いつき引つ張って、吊橋へ進んでく。

「片瀬は怖くないのか？」

「怖くないに決まってるわよ」

強い口調で答えるが、片瀬の足は少し震えているように見えた。

下を見たら怖くて動けなくなってしまうようなので、下を見るなと自分に言い聞かせながら、吊橋を少しずつ進んでいく。

「この吊橋、大丈夫だよな」

どうしても嫌な想像をしてしまう。

「大丈夫よ、多分」

やっぱり怖いのかさつきとは違い、片瀬はか細い声で答えた。すると、がたん、と吊橋は大きく揺れる。

「うわっ」

思わず声を出して、ロープにつかまる。

「いやあああ、誰か助けて！」

片瀬は甲高い声で叫びながら、座り込んでしまった。

「えーと大丈夫か、片瀬」

「大丈夫、じゃない」

「まあ、とりあえず立てよ」俺は片瀬に手を貸そうとする。

その時、身体が動かなくなった。

まるで時間が止まってしまったのように。

だんだん周りの景色が何か引つ張られた後みたいにくにやぐにやと歪んでいく。

そして意識はブラックアウトした。

夢の空間

だんだんと意識が戻ってくる。

「うーん」

億劫に瞼を開けると、驚嘆してしまった。

「どこだよ、ここ」

さっきまで吊橋にいたはずなのに、見上げると碧色の空、周りを見ても何もないのだ。

唯一あるのは大樹ただひとつ。

下を見ても、大樹がどこから生えているのかもわからない。上を見てもどこまで、生えているということもわからない。

しかし、さらに驚いたのは、地面がないのだ。

だからといって落ちるわけでもない。浮いているのだ。

いままで、重力のせいで、何か強い糸で繋がっていたかのような感覚はなくなり、

その糸が切れて身体が楽になったように感じる。

まるで、無重力空間に放り出されたみたい。いや、もしかしたらそうなのかもしれない。

とにかく常識じゃ考えられない、今の俺はそんな場所にいるのだ。

「さっきまで片瀬といたのに、片瀬は今どこにいるんだ？」

周りを見渡して呟く。

顎に手を当てて少し考えてみると、こんな場所は常識的に考えてどこにもないのだ。

それにしても、自分でも驚くほど冷静にこの状況を考えられる。

多分、あまりにも非現実的過ぎて、現実だと思えない。

なら、夢なのではないか、と考えた結果、そう自分の中で結論がついた。

まあ、虚構の世界なら何が起こっても、冷静なのは当たり前か。夢なら片瀬はいるはずがないので、片瀬に関しては考えなくていい。

い。

そんなことを思っていると一匹の猫が目に入る。

「あ、グレじゃん」

グレというのは最近、学校の帰り道で餌をやったり、世話をしている猫だ。

ちなみにグレという名前は灰色の猫だからという安直に名付けたわけじゃない……

「グレ、こっちにおいで」

「今、行く」

グレは、人語で答えた。

「夢の中では、猫も人としやべれるようになるのか」
俺は少し口元を緩ませながら、呟いた。

「いつも、世話になってるから、お礼として面白いものを見せたいと思うよ」

グレが俺に喋りかける。

「どんなことをするんだ？」

猫と喋っているということに不思議な感覚を感じながら、言葉を返す。

すると、グレは猫の姿からテレビに姿を変える。

「夢なら、なんでもありなんだな」

思わず苦笑しながら呟く。

テレビに何かが映し出される。

映し出されていたのは、蔓の塔である。

すぐに違う映像に切り替わり、俺？と知らない誰と喋っている。

「誰と喋ってるんだ？」

音が出ないので、何を喋っているのかは分からない。テレビの映像が消えた。

その瞬間、意識が薄れていき、さっきと同じような感覚に襲われる。

『バイバイ、また会おうね』という文字をテレビが映し出すのが見えた。

夏至前(8)

「何、ぼーっとしてるのよ?」

春が俺の肩を叩く。

「いや、なんでもない」

と答える。

が、妙な違和感を感じる。まるで、今まで何か夢を見ていたような

もちろん、そんな訳ないのだけれど。

「高雄山のどこらへんにその噂のスポットとやらはあるんだ。」

森脇は片瀬に聞く。

「頂上までは登らないわ、リフトがある場所よ」

片瀬は答える。

「ねえ、リフトに乗れるの?」

春はぼけっとしながら聞く。

「いや、この時間にリフトが動いている訳ないだろ」俺は呆れながら答える。

「でも動いてるかもしれないじゃん」

春は強い口調で言う。

あれ?

何故か少し違和感を感じた。

「あれ、この会話さつきしなかったけ?」

「はあ?してないわよ」

何故だろう、既視感^{デジャヴ}があるのは……

「気のせいかな」

小さく呟いて、俺はそれ以上考えることはせずに、リフト場に向かった。

リフト場に着く。

もともと、このリフト場はかなり昔からあるのだ。

しかし、そのせいかこの闇夜では、廃墟のように見えてしまう。

「ここに来たはいいけど、何するんだ？」

俺はリフト場にあるベンチに腰を掛けて、片瀬に聞く。

「特にないけど」

片瀬は即答する。

その答えに俺は思わず心の中で思い切り片瀬を罵倒してやりたくなる。

「じゃあなんでここに来たんだよ。」

俺と同じ気持ちであろう森脇がうんざりした表情をしながら、聞く。

「私が知っているのは、あんた達に話したところまでで、それ以上は私だって知らないわよ。」

だから、この一時間待つだけよ」

片瀬もベンチに座り、鞆から本を取り出す。

春は神社でお祈りをするみたいに、ずっと手を重ね合わせながら突っ立っている。

どうやら春は、リフトを動かすために念を送っているらしい。

「でも待つだけってのも、面白くないよなあ」

森脇がため息を吐くように呟くと。

「なら、写真でも撮ってみたら？このリフト場は昔、事故起こしたことがあるみたいだし、

こんな時間なら、何か写るかもね」

片瀬はポケットに入るくらいの小さい懐中電灯の光で、本を読みながら話す。

「へえ、なら撮ってみるか」

森脇はリュックサックからカメラを取り出し、何回も廃墟のような雰囲気漂わせるリフト場周辺を撮っていく。

暗闇に目が慣れてきた俺にはカメラのフラッシュが焚かれるたびに、その光がとても眩しく感じて目を細めてしまう。

結局、なにも起こらずに一時間がたった。

「時間たったけど、なにも起きなかったわね」

片瀬は、ちよつと淋しそうに言う。

「まあ、これに何か写ってるかもしれないし」

森脇は少し得意げにカメラを持ち上げる。

「写ってればね」

片瀬は少し蔑むような目で、森脇を見る。

こいつ、自分で写るかもと言つといて信じてないのか。

春はまだ念とやらを一生懸命に送っている。

当然、リフトが動く様子はない。

「動け、動け、動いてよぉ」

春はかすれるような声で呟く。

どこかで聞いたような台詞だが、深くは考えないことにする。

「春、そろそろ帰るぞ」

「分かった」

春はがつくしと、少し肩を落として答える。

帰ろうとしたとき、春は振り返ってもう一度リフトの方を見る。

「あれっ、動いた？」

俺も振り向いて、リフトを見るが動いてない。

「気のせいだろ」

「でもっ、」

春は言い返そうとしたが、やっぱり気のせいだと思っただけ、何も言わなかった。

俺たちは闇夜の道を帰る。

夏至前（9）

三日後

才力研の活動として、森脇がみんなを昼休みに部室へ呼び出した。

それにしても、片瀬ではなく森脇から呼び出しとは珍しい。

確かに森脇は部長ではあるが、それは片瀬が、

「部長なんて委員会やらに出なきゃ行けなくて面倒なのよ、それに新聞部一つだけならまだしも、二つなんて絶対出来ないから。だからよろしくね」

と、無理矢理、面倒な役割を森脇に押し付けたからである。

それを文句を言いながらもその役割を受けてしまう森脇も森脇だが。

なので、実際の活動では森脇はお飾りみたいなもので、実際は片瀬が仕切っている。

どうして、今日森脇はどうして呼び出しなんかをしたのかわからない。

そんなことを考えながら部室へ向かうと、あっという間に部室へ着いてしまった。

部室の扉を開けて中に入るともうみんながいて、どうやら俺は一番遅かったらしい。

「森脇、なんで呼び出しなんかしたんだ？」

率直に疑問を投げかける。

「この前、深夜に高雄山へ行っただろ。その時に撮った写真に俺達以外の人が写ってたんだよ」

少し興奮したような口調で話す。

「幽霊ってこと？」

春は森脇に好奇の目を向ける。

「あれ、本気で信じてたの？」

片瀬は呆れた声を出して続ける。

「あの事故のことは作り話よ、実際にはそんなことはなかったのよ。どうせ心霊写真だかなんだか知らないけど、よくあるフラッシュの反射や、岩とかがぶれて、人間の顔に見えるだけでしょ」

片瀬は森脇に仕切られるのが嫌なのか眉を寄せて言う。

「俺も見たときは驚いたし目がおかしくなったと思ったさ。でも、これを見たらそんなことは言えないよ」

森脇は神妙な顔つきで言うと、鞆の中からたくさんの写真を取り出して、それらを机の上に並べていく。

その写真を見た時、少しの間言葉が出なかった。

「気のせいだと思ったけど、やっぱり何かいたんだ」

それを見て、一番先に口を開いたのは春だった。

写真には、リフトに乗っている少女がこちらを見て、カメラ目線でピースをしている姿がはっきりと写っている。

だいたいテレビでよく見るようなはっきりと写っている心霊写真というものは大掛かりな手品であったり、写真を加工したりしたもののだが、それらすべて、俺達の誰にも出来るはずがないのだ。

「でも、この一枚だけじゃ」

まだ信じられないのか、それとも、信じたくないのか片瀬は小さな声で反論する。

もともと才力研の目的はこのようなものを見つけるつもりなのだが、このようなものを今まで見つけることはなかった。

なので、今までは噂という曖昧なものだけだったが、

実際に、ここまで明確に非日常的なものが現れると、言葉では言い表せない、少しの恐怖心が自分の心の中に芽生えていく。

おそらく片瀬の表情を見る限り、俺と同じ気持ちなのだろう。

「一枚だけじゃないよ、ほらここにも」

春は少し楽しげな声で片瀬に言いながら、他の写真を指差す。

全部で三十五枚あるうち、リフトが写っているのは十八枚、そのすべてに少女が写っていた。

しかし、俺達とは違って、春はこの写真を楽しそうに眺めている。

どうやら、春の心には恐怖心というものは芽生えることなく、むしろ好奇心が芽生えたみたいだ。

「確かに少し怖いけどさ、ようやく才力研でこのようなものを見つけたんだからさ、」

森脇が写真をひらひらとさせながら、喋る。

その話の最後まで言わずとも俺はもう森脇が言いたいことは分かっている。

「そりゃ、もちろん調べるしかないだろ」

森脇より先にそして、自分の心の中にある少しの不安を吹き飛ばすために、少しだけ得意げに言ってみた。

僕という少女(1)(前書き)

場面が思いつきり変わります。

僕という少女（１）

大きな木々たちに囲まれた小さな村があった。

そんな自然に囲まれた小さな村には似合わぬ姿をしている少女がいた。

その少女は大きなゴーグルとヘッドセットをしていて、少女は燃えるような赤い目をきらきらと、輝かせながら嬉しそうに、芝生に寝転がりながらラジコンのコントローラを握っている。

その少女はどこか、少年にも似ている中性的な雰囲気もあるようにも見える。

「いいな、一回僕も行ってみたいなあ」

その少女はぽつりと呟く。

少女はゴーグルを外して、近くにある小さな小屋を指差す。

「タラン博士、今日はあそこに行く日でもないのになんで来たの？」

少女はタラン博士と呼ばれる青年に尋ねる。

「いや、それを返してもらおうと思ってね」

「いやだよ、返す期限はまだじゃないか？　だから僕はもう少しこいつを借りるよ」

少女は口を尖らせながら、ゴーグルとヘッドセット、コントローラを取られまいと、体全体で隠すようにしてそれらを覆う。

「それが、残念なことに回収が前倒しになったんだよ。もう十分にデータも取れたみたいだしね。でも君の反応を見る限り、いい物が作れたみたいでよかった」

タラン博士は微笑しながら言葉を返す。

「でも、あっちにあるのはまだ回収してないのなら、もうちょっと遊ばせてくれてもいいじゃないか」

怒声にも近い声で、少女は叫ぶ。

「だから、君が遊ぶから回収するのが難しくなっているんじゃない

か。だいたい、それは君のおもちゃじゃないんだ。これは重要なデータを取るための実験のために作ったものなんだよ」

「でも、タラン博士はあっちに行くことは出来るんでしょ？　ならデータを取るまでもないと思うけどな」

駄々をこねている子供のように少女は少しムキになって反論する。

「はあ、確かに僕はあっちに行くことは出来るし、実際に行ったこともある。でもあっちに行くには、準備も必要だし、いつでも行けるといってもないんだ。時間にその時の環境、それにこつとあっちの世界がリンクしている時じゃないといけないしね。それにもしあっちの世界に行ったとしても僕なんかはあんな場所に入れないだろうさ。だからそいつを使っただし、君もあそこのデータを取る仕事をしてくれてたから、そのご褒美に少しの間、特別に君に貸してあげてたものなんだから、礼は言われることはあっても、文句を言われる筋合いはないよ」

呆れながら、タラン博士は目の前にいる少女に向かって言う。

「あーもう説教なんかは聞きたくないよ。分かったから、もう返すよ」

凄く不満な顔をしながら、耳につけていたヘッドセットを外す。

そしてゴーグルとヘッドセット、コントローラを手にとって、タラン博士がいる方向にその手を伸ばす。

「そうそう、素直に返してくれればいいんだよ」

タラン博士はそれらを手に取るうとした瞬間、

少女は片手を使っ、地面を蹴り飛ばすようにして宙を舞った。

そして、地に足が着くと少女は口から舌を出してあっかんべーのようなポーズをする。

「まだまだこれは使わせてもらっからねー」

少女は叫びながら、どこかへ走っていった。

「やっぱり、あの子の能力は興味深いなあ。問題児なのがちょっと残念だけど」

苦笑しながらタラン博士は呟く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9063x/>

夏至と僕

2011年12月31日20時49分発行